

南柚笑楚満人の黄表紙

— 『仇報孝行車』 翻刻 —

木村 薫

はじめに

本作品は、南柚笑楚満人なんせんしょうそまひとによつて書かれた敵討物の黄表紙である。

南柚笑楚満人は、黄表紙を中心に執筆した戯作者で、黄表紙における敵討中興の祖であり、『敵討義女英』かたきちぎじよのなぶさ（寛政七年刊 南柚笑楚満人作 歌川豊国画）が代表作とされている。

南柚笑楚満人について、同時代の戯作者である曲亭馬琴は「文化に至りて敵討の臭草紙流行により時好に称ひて折々あたり作ある」（『近世物之本江戸作者部類』¹）とし、式亭三馬は「敵討物を著作して大に行はる」（『式亭雜記』²）など、敵討物の流行を担った作者として紹介している。更に「楚満人義女の英、大に名あり。十余年すたれたるかたき打を再興し、是より年々に続出し、文化に至りて大に行はる、は、そま人の功と云べし」（『漣水散人編』³）「楚満人、義女の英、大に名あり、十余年廢たれたる敵討を再興し、是より年々に続出し、文化に至りて大に行はる、は、楚満人の功と云べし」（『戯作外題鑑』⁴）「文軒翁云、楚満人『義女の英』大に名あり、十余年廢れたる敵討を再興し、是より年々に続出し、文化に至りて大に行はる、は、楚満人の功と云ふべし」（『漣水散人編』大久保葩雪増補『増補青本年表』⁵）「此作出で、大に行はれてより、文化に至り敵討物の全盛を極むるに至れり、世に楚満人を黄表紙敵討物の祖と称するも畢竟是がためなり」（『朝倉無声撰』新修日本小説年表』⁶）「此作非常の大当りで、今後敵討物が全盛を

極めるに至った。故に楚満人が黄表紙敵討物中興の祖と称せられる」(山崎麓編『日本小説書目年表』⁷⁾)などと『敵討義女英』を取り上げた評は多く、敵討物中興の祖として広く紹介されている。

しかしながら現代の黄表紙研究の第一人者である棚橋正博氏は、これらの資料を挙げた上で、『近世物之本江戸作者部類』『式亭雜記』や『戯作者撰集』(石塚重兵衛編 天保末期〜嘉永年間成立)などに『敵討義女英』の名が出ないことを指摘し、「むしろ楚満人の代表作としては、文化元年刊『仇報孝行車』⁹⁾が挙がるとしている。

石田元季氏の『草双紙のいろく』¹⁰⁾、鈴木重三氏の「合巻物の題材転機と種彦」¹¹⁾、そして棚橋正博氏の『黄表紙総覧』¹²⁾によれば、『敵討蟒蛇覆』(文化二年刊 南袖笑楚満人作 歌川豊国画)、『恋湊客入船』(文政七年刊 欣堂間人作 歌川国丸画)、『富士裾うかれの蝶衛』(文政十四年刊 柳亭種彦作 溪斎英泉画)の序文には、『仇報孝行車』の名が挙がっている。すなわち『敵討蟒蛇覆』では「去年孝行車を作りて世間に評判を轟かし」とあり、『恋湊客入船』では「南袖笑楚満人復仇の種を、孝行車に積で世にとどろかしてより」とある。どちらも南袖笑楚満人が世間に評判を轟かせた作品として『仇報孝行車』の名を挙げているのである。『富士裾うかれの蝶衛』に関しては「孝行車のよく廻りし口調」と、評判作であるということは記されていないものの、作品名を挙げていることには違いない。『仇報孝行車』は楚満人にとつて、『敵討義女英』に次ぐ人気作品であったということができさるだろう。

また、『仇報孝行車』では、先夫の敵と知らずにその男を後夫としてしまう女性が登場する。これは、翌年に刊行された山東京伝による読本の代表作である『桜姫全伝 曙草紙』(文化二年刊 歌川豊国画)と同様の設定である。京伝が『仇報孝行車』を参考としたかどうかはわからないが、『曙草紙』の女性像を追求するに当たり、『仇報孝行車』に見られる「敵である男をそつと知らずに夫としてしまう女性」という構造について着目する必要があると考えている。その見地からも『仇報孝行車』は良い資料の一つとなるのではないだろうか。

代表作として名高い『敵討義女英』は既に翻刻されているものの、同時代の戯作者が名を挙げる『仇報孝行車』は管見の限りいまだ翻刻されていない。黄表紙の作風の変遷を考える時、女性と子どもを主人公にした本作の意義は大きい。今後の南柚笑楚満人研究、ひいては黄表紙、草双紙研究に必須の文献として、本作を翻刻するものである。

書誌

底本 専修大学図書館所蔵向井信夫文庫

刊年 文化元年

画師 歌川豊国

版元 西村与八

大きさ 中本。十六・六糎×十二・三糎。

匡郭 十四・三糎×十一・二糎。

前編三卷十五丁、後編二卷十丁合一冊

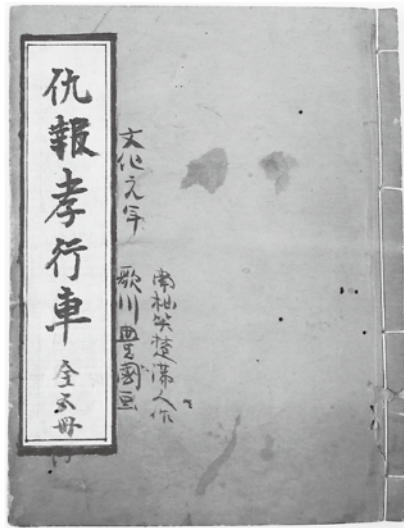
表紙 茶色・無地(替表紙)。題簽は左肩に書き題簽で「仇報孝行車 全五冊」とある。ほかに、題簽の右に「文化元年 南柚笑楚満人作 歌川豊国画」との書き入れがある。

柱刻 「かうくくるま ぜん」二丁～十五丁

「孝行車 のち」十六丁～二十五丁

旧蔵印 「小自在庵」(向井信夫)

今回底本として使用する専修大学図書館蔵向井文庫本は絵題簽を欠く。本作品の絵題簽は、国立国会図書館デジタ



ルライブラリー¹³⁾や国文学研究資料館¹⁴⁾所蔵マイクロ資料などで確認できる。国会図書館本は前編上巻・下巻の絵題簽が備わる。前編中巻の絵題簽は、都立中央図書館蔵加賀文庫本（国文学研究資料館所蔵マイクロ資料で確認）にあり、こちらは前編上巻・中巻・下巻が揃っている。また、『稗史叢』に収録のものには後編下巻の絵題簽のみ確認できる。棚橋正博『黄表紙総覧』図録編¹⁵⁾では、前編上・中・下、後編下の絵題簽が掲載されている（後編上はない）。

注

- (1) 『近世物之本江戸作者部類』木村三四吾編 昭和六十三（1988）年 八木書店
- (2) 『式亭雜記』『続燕石十種』所収 森銑三・野間光辰・朝倉治彦監修 昭和五十五（1980）年 中央公論社
- (3) 『稗史提要』『戯作文芸論—研究と資料—』所収『稗史提要』をめぐる諸問題』（『文芸研究』第七十九集、昭和五十一（1976）年十一月発表） 広瀬朝光著 昭和五十七（1982）年 笠間書院
- (4) 『戯作外題鑑』『燕石十種』所収 森銑三・野間光辰・朝倉治彦監修 昭和五十五（1980）年 中央公論社
- (5) 『増補青本年表』大久保葩雪著『新群書類従第七』所収 市島謙吉編 明治三十九（1906）年 国書刊行会
- (6) 『新修日本小説年表』朝倉亀三著 大正十五（1926）年 春陽堂
- (7) 『改訂日本小説書目年表 書誌書目シリーズ⑥』山崎麓著 書誌研究会改訂 昭和五十二（1977）年 ゆまに書房
- (8) 『戯作者撰集』広瀬朝光編 昭和五十三（1978）年 笠間書院
- (9) 『日本書誌学大系48（2） 黄表紙総覧 中篇』敵討義女英「項 棚橋正博著 平成元（1989）年 青裳堂書店

- (10) 『書誌書目シリーズ』④ 和漢名著解題選 第四巻 草双紙のいろいろ』 石田元季著 昭和三二(1928)年原本発行 平成八(1996)年 ゆまに書房
- (11) 『合巻物の題材転機と種彦』鈴木重三著 『国語と国文学 第三十八巻 第四号』国語と国文学編集部編 昭和三十六(1961)年 至文堂
- (12) 注9書『敵討義女英』項
- (13) 国立国会図書館デジタルライブラリー (<http://dl.ndl.go.jp/>)
- (14) 国文学研究資料館 (<https://www.nijl.ac.jp/>)
- (15) 『日本書誌学大系 48 (5) 黄表紙総覧 図録編』棚橋正博著 平成十六年六月 青裳堂書店

翻刻凡例

- 一、原文に句読点、濁点、半濁点を補い、かつ意味の通りやすいように適宜漢字に置き換えた。
- 一、漢字に置き換えた字は、もとの仮名を振り仮名として付けた。
- 一、原文に本来付いていた振り仮名は、右と区別するために()内に入れた。ただし、序文等、概ね振り仮名つきの部分は、その旨を注記して、原文通りに翻刻した。
- 一、漢字は置き換えたものに関しては、原則として新字体を用いた。漢字仮名とも、異体・略字体は現行のものに改めた。
- 一、「ミ」「ハ」は、片仮名としての意識の窺えるもののみ片仮名で表記し、他は平仮名として扱った。
- 一、翻刻は見開き面毎に記し、本文の後に登場人物の台詞などの書入れを「」に入れて付した。台詞の場合は発言

している登場人物と思われる者の名前を「」の前に（ ）に入れて付した。書入れについては右から左への方向にこだわらず、意味の通りやすいように並べた。

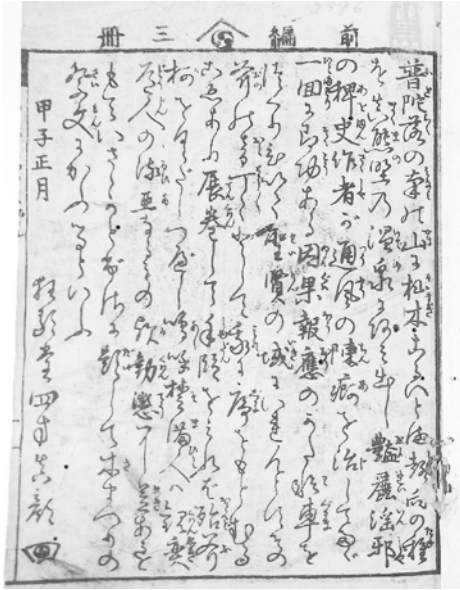
一、丁付けは見開き面を単位として丁の移りのところに各々表を「オ」、裏を「ウ」として付した。

一、ただし、見開きの一面が巻末、巻頭の箇所（五ウ、六オなど）は、翻刻を半丁ごとに分離し、その丁付けを示した。

一、翻刻は序から本文の終わりまでとした。

一、なお、作品の中には人権に関わる用語が使用されているが、資料的な性格を考えて原本通りに翻刻した。

【一オ】



翻刻

一オ（振り仮名はそのまま）

普陀落の南の山に、みだらくのみみやま 杣木こまきこるいとま趣向しゆかうの種ねを、真能野まぐまのの温泉おんせんにあみ出し、えんすい 艶麗淫邪えんれいゐんじやの稗史はいし作者そしやが、通風つうふうの陳卿ちんあを治して、たゞ一回ひとまりに即功そくこうある、因果報應いんぐわはうおうのかた輪車わぐるまをつくりひいて、聖賢せいけんの域いにいれんとす。その斧おのの音おと丁々ちやうちやうとして、我われに序じよをもとむるこゑあり。展卷てんけんして手段しゆだんをみれば、殆ほとんど斧柯ふかをくだしつべし。嗚呼あ、楚満そまひと人は観奕くわんあつ道人だうじんの流聖りゆせいなるもの歟き、勸懲くわんてうに益えきあるをもていさ、かたとぶさに題だいして木



「二ウ・二オ」

まつりの祭文にかふるといふ。

甲子正月 狂歌堂四方真顔

「前編三冊」

一ウ・二オ

常陸国、松倉とかやいふ所に、相原五郎太夫といへる郷土あり。先祖は由緒あるものにて、人に敬はれ家富み栄へける。しかるに五郎太夫、本妻はありながら、おさいといへる女に馴れ初め、別荘に置きて通ひける。此おさいが腹に男子一人産まれ、喜之松と名付けける。段々成長して今年十才になり、五郎太夫いまだ子なければ、寵愛甚だし。されども、五郎太夫事元は他の家より来たり、本妻の照葉は家の娘なれば、喜之松を我が方へ呼び取りがたく、又、照葉は此事をとくより知るといへども、嫉妬の心はかつてなく、夫が心遣ひをせんか、とわざと知らぬ体にて居たりける。また、勝之介といへる子飼いの家来あり。これは元捨て子にて、先年五郎太夫が家の門の前に泣きあたりける

二ウ・三オ



を、不憫なる事に思ひて拾ひとり育て、もはや十五才になり、心賢き者ゆへ家来となし、五郎太夫夫婦の氣に入りなりける。

(勝之介) 「手盛りと致しませう」

(勝之介) 「旦那のお供では美味いものが食はれる」

(おさい) 「今日は何も珍しいものもござりませぬ」

(五郎太夫) 「左酌で、わしを七日酔はせるか、ヲ、よし〜」

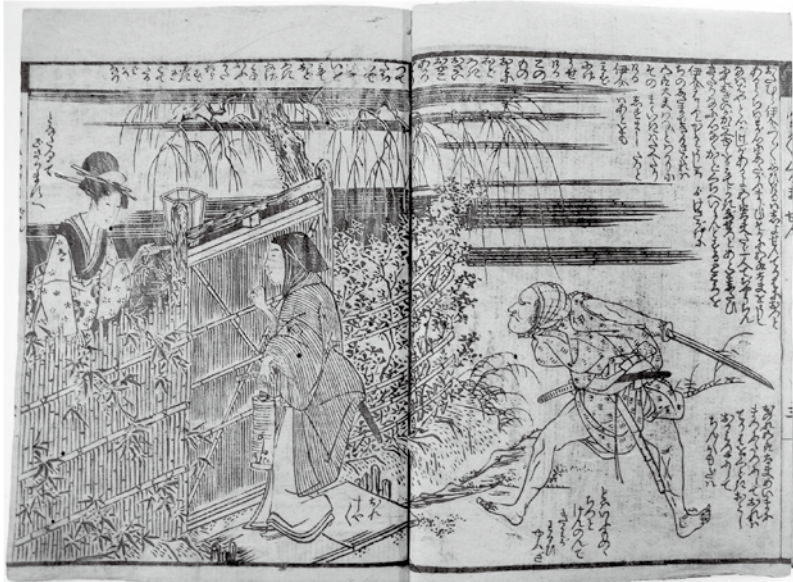
(喜之松) 「お父様たんとあがつてお酔ひなされますな」

(五郎太夫) 「これ清書きはどふじや、俺に見せぬか」

二ウ・三オ

こ、に鎌倉の浪人、小田村伊介といふ者、五郎太夫が方へ心安く来たりけるが、五郎太夫が本妻照葉は三十才ばかりにて、至つて美しき生まれなるに、恋慕して様々心を尽くしけれども、照葉は一体、操正しき女なれば靡く気色さらになし。すべき様なかりしが、五郎太夫事は入り婿なりと聞き、照葉に嫉妬を勧めて夫婦仲を悪くさせ、追ひ出さ

「三ウ・四オ」



せんと、おさいが事を様々に焚き付けけれども、少しも
 惰気の色見へねば、仕方なく口より出次第に、おさいは他
 に男あつて、五郎太夫を殺し、誰憚らず夫婦にならんと企
 むなり。それを毎夜く通ふ、五郎太夫こそ不憚なり、な
 どとあらぬ事をならべたて、言へ共、照葉は、いかでさる
 事あるべき、と心を落ち着け、色にも出さねば、伊介も
 詮方尽き、此上はいかにも謀事をもつて靡けん、と悪心を
 起こす。

(伊介)「そふいふ水くさい男に、心中を立てるとは当世で
 ないぜ。まだくきくと吃驚な話がありさ。心得の為によ
 く聞いておきなよ」

(照葉)「イへく何と仰つても惰気嫉妬は嗜み、何とも
 存知ませぬ」

(伊介)「野暮めくそれはつまらぬ」
 (おかや)「ヲヤく、ご新造としやう寝をしたがるそふだ、
 ほうやほう」

〔四ウ・五才〕



小田村伊介つくづく思ひけるは、所詮照葉に夫あるうちは、
 我が心に従ふまじ。密かに五郎太夫を失はばや、と心掛け
 しが、ある夜、五郎太夫たゞ一人手提灯にて、おさいが方
 へ行くを見て、良き時節と後を慕ひ来たり、何心なく門口
 へ入らんとする所を、伊介走りかかり、後ろより袈裟懸け
 に乳の下まで斬り下ぐれば、五郎太夫、はつとばかりにそ
 のま、息は絶へたりける。し済ましたり、と伊介は後をも
 見ず逃げ失せける。この物音に驚き、おさい親子灯りを持
 つて立ち出で、此体を見て驚き喚く事、大方ならず、呆れ
 果てたるばかりなり。

(おさい)「何方様でござりますへ」

(五郎太夫)「俺じゃ〜」

(伊介)「おのれ五郎太夫め、今に真つ二つにして、俺は
 照葉を口説きおとし、おかみ様にしてちんく〜かもだは」
 (伊介)「とは言ふもの、ちつと剣呑で気味が悪ひやふだ」

四ウ・五才

「五ウ・六才」



此事、早速本家へ知らせければ、照葉聞いて大きに驚き、
 急ぎ駆けつけ夫の死骸を見て、泣き悲しみけれども、何者
 の仕業共知れず、又証拠もなし、さてはかね〜伊介が
 言いしに違ひなく、おさいが隠し男の業ならん、と大きに
 怒り、おさい親子をさま〜問いしが、おさいは元より身
 にかつて覚へなき事なれば何と答ふべき言葉もなく、たゞ
 ひれ伏して泣きぬたり。照葉はなを〜怒り、しぶとき女
 かな、と家来に言いつけ、親子を厳しく縛め、我が家へ引
 かせ、泣く〜夫の死骸を取り片付け、それ〜の野辺送
 りを営み、悲しみにつけても、おさいが憎さ無念〜と、
 怒りしは、おさいは知らぬ事ながら、理にてぞありける。
 (照葉)「今までわしが愠気せぬ心の義理もなく、隠し男と
 添はふと企んで、此やふな事をしやつたのふ」
 (おさい)「もふ〜勿体ない、私がんとして左様な悪事
 を致しませふ。その思し召しはお許し下さりませ」
 (勝之介)「口惜しや、何者の仕業じや」

かくて、照葉は女心の一筋に、おさいが仕業と思ひしかば、夫の仏事はそこ／＼に毎日／＼おさい親子を引き出させ、様々拷問したりける。親子はた、夢の心地にて泣くより他、答へもせざりしかば、あまりに問いかねて、湯水を与へず塩責めにぞしたりける。

（おさい）「なさけない、どふぞ此子ばかりはお許し下さりませ」

（喜之松）「イエ／＼私を責めて母様を堪忍して下さりませ」

（照葉）「イヤノウ情けないとは其方の事、尋常に白状しや。その子も大方隠し男の種であらふ。苦しい切ない目をせぬうち、早く言ふてしまふがよい。あのまざ／＼しい顔わいのふ。呆れて涙も出ぬわいやい」

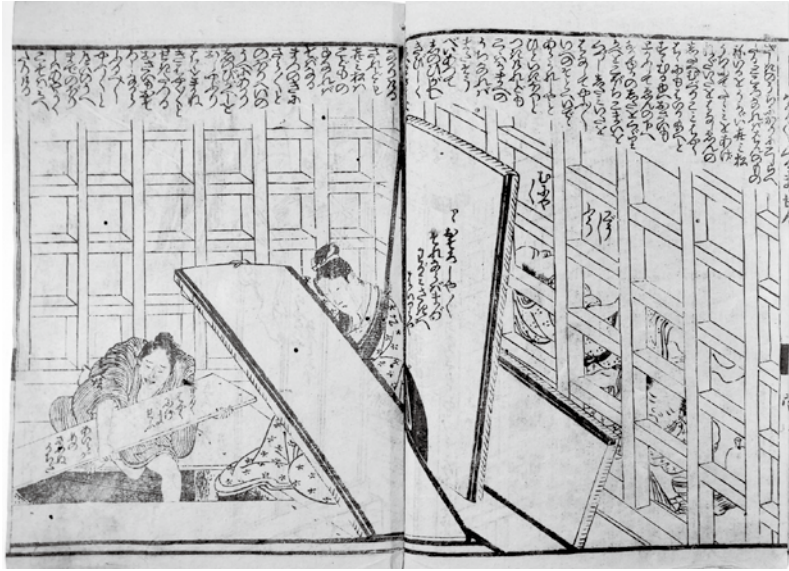
六オ

おさい喜之松は、我が身に覚えなき疑いを受けて言い訳立たず、蜘蛛手結ふたる檻の内に入れられ、塩責めにあい、もはや命も失はれんとしけるに、今年十才の喜之松、泣く泣く母に言いけるは、かく毎日／＼責められて、責め殺されんには是非なければども、我は父五郎太夫の敵を尋ね出し、此恨みを晴らさんと思ふゆへ、甚だ命を惜しむなり。いかにもして此所を忍び出でんと工夫し置きたり、我と一緒逃げて給へ、と勧めれば母は、愚かなる事をいふものかな、如何して逃れらるべき、例へ逃れ出る共、我は足手まといなるべし、一人逃げよ、と申しける。

（喜之松）「どうで責め殺される命、逃る、だけ逃げてみやふ」

（おさい）「どうして逃がぞふぞ、見付けられたら尚憂き目、悲しやく」

「六ウ・七オ」



六ウ・七オ

座敷の内に仮に拵へたる所なれば、番の者寝入るを窺い、
 喜之松内にて畳を上げ根太板を離し、縁の下へ潜り込み、
 早く母にも入り給へ、と勸むるゆへ、おさいも、とかふし
 て縁の下へ降り床の下を潜り、壁を壊ち、木舞を崩し、
 下見板を離して、やふく家の外へ出で、あら嬉しやと
 一息ほつとつきけれども、こ、は構への内なれば、また
 総堀あつて、忍ひ返し厳しく越へべき様はなかりける。さ
 れども喜之松は子供の事なれば、側なる松の木にさらく
 と登り、堀の上に入り忍び返しを押し破り、母を招き、
 早くくと急ぎ立つる。おさいも恐ろしながら震へく
 やふくと堀の上まで登りしは危うくこそは見へたりけ
 る。

(番の者) 「ごうくふう」

(番の者) 「むにやく」

(喜之松) 「サア早く逃げませふ。あいらが目の覚めぬ
 うちだ」

「七ウ・八オ」



（おさい）「ア、恐ろしやく、それならばまづ我が身先へ入りや」

七ウ・八オ

またその堀の外に八尺ばかりの堀あつて、越ゆべき様はなかりける。喜之松、母に、此通りに飛び給へ、と向かふへひらりと飛びにける。おさいは見るも危うく震へけるを、喜之松下より早く、と焦りければ、おさいも今は命がけ、死ぬるがたかと眼を塞ぎ、観念して思ひ切つて飛び越へける。

おさい堀の上より飛ぶ事は飛びけれども、駒寄の石にてした、かに腰を打ちて動く事叶わず、喜之松焦り手を持つて引き立つれど、子供の力、捗らず、母は泣く、我をばこ、に捨て置ひて早く落ちよ。なまなか母を捨てかねて、二人ながら捕らえられ、憂き目を見せてたもるな、と言ふに、喜之松、途方に暮れていたりける。こ、に源次兵衛といふ者通りか、り、始終見いたりしが、あまりの事に愛お



「八ウ・九オ」

しとて、こなたへ来たり給へ、とおさいを肩に引き掛け、人なき所へ連れ行きける。

（喜之松）「サア〜母様、人の見ぬうち、早くこ、へ飛びな〜」

（おさい）「のふ怖や、なんとしやう」

（喜之松）「そふ手間が取れては悪ひわな」

八ウ・九オ

源次兵衛は喜之松おさいに、何処へ心ざして行くぞ、と問ふに、さしあたつて当てもなく如何せん、と言へば、思ふに後より追つ手かゝるべし、上野の方へ落ち給へ、他の領分なれば、たち忍ぶに良かるべし、本道は人目多し、山道難所なれ共、追い手の氣遣ひなし。道の知れる所まで送りてやらん、と甲斐甲斐しくおさいを負ぶひて、細道なる山坂を三里ばかりぞ送りける。やふ〜かの山をうち越へ、こ、ははや国境なり、と辺りの家より筵を尋ね出し、繩を結びつけ、その上におさいを乗せ、これを引きづりて行く

「九ウ・十オ」



べし、と喜之松に教へて別れける。喜之松喜び源次兵衛を伏し拝み、教への如く引きづりく、当てもなく急ぎける。

(喜之松) 「ア、くたびれた」

(おさい) 「喜之松早くおじやよ」

(源次兵衛) 「ア、心がせく」

九ウ・十オ

小田村伊介は相原五郎太夫か死したる後、随分親切に見せかけ様々世話をぞ焼きたりける。さても五郎太夫が妻照葉は、夫が横死に遭ひ、元より子もなく相原の家断絶せんとしけるを悲しみ、親族の者共段々勧めしかば、呑み難く、又の夫を迎へばやと相談極まり、それにつき小田村が此程の親切、言葉に述べ難し、と思ひ、伊介こそ然るべし、と談合して日を選び祝言をぞしたりける。照葉は先祖の家名断絶を悲しみ後添を入れしは道理なれども、操正しき貞心にて、夫の敵とは夢にも知らず、伊介を又の夫とせし事、神ならぬ身とは言いながら口惜しかりける次第なり。



「十ウ・十一オ」

(伊介)「ヤレ〜嬉しや〜思ひのまゝじや」

(勝之介)「去る者は日々に疎しとは、よふ言ふたものじや。

ホイこれは愚痴じや。めでたい〜」

(伊介)「やれも〜骨を折つた。めでたい〜」

十ウ

かくて喜之松は母おさいを引きづり〜、兎角して上野の
 国府に着きけれども、知る人とてもあらざれば、此処彼処
 彷徨ひ食物を乞ひて母を養いければ、里人見て、その孝行
 なるを憐れみ、村外れに小屋を作りて入れおき、また、い
 さり車を拵へて与へしかば、大きに喜び毎日〜此車に母
 を乗せ、その綱を引いて歩き、物を乞ひ、諸人の憐れみを
 受け、これにて三年を過ごしける。心の内ぞ憐れなり。

(おさい)「ご合力をお願ひ」

(通行人)「ヤレ〜可哀想に、奇特なものだ」

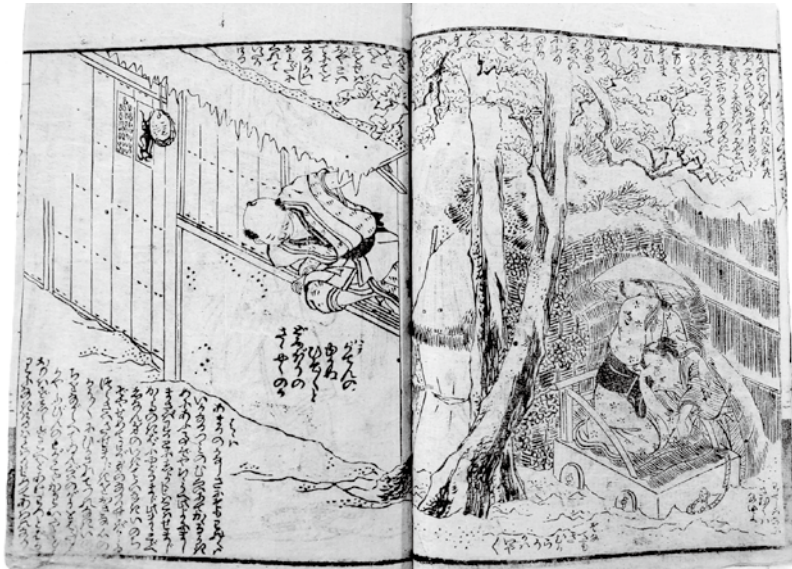
(喜之松)「ハイ〜有難ふ存知まする」



喜之松おさい、ある時、秋の大雨にあい、凌がん為、大木の元に車を寄せて晴れ間を待ちしが、折節大勢雨宿りしたるその中に修行山伏、おさいが車に乗りたるを見て、酒機嫌なれば錫杖を振りて、小栗の祭文を読みければ、喜之松聞くに小栗の餓鬼病、熊野の本宮の湯にて癒へたりと言ふより心付き、我もその湯へ母を入れて本復させたく、熊野へ行かんと思ひ立ちける。

(山伏)「さるほどに、照手前、小栗殿とはつゆ知らず、餓鬼やみ車を引くほどに」
 (通行人)「降るはくこれはたまらぬ」

さても喜之松は小栗の祭文を聞きしより、何とぞ母をその熊野の温泉に入れて、抜けたる腰を元の如くにせんものと幼心の一筋に色々心を尽くしける。所詮家もなき親子、



「十二ウ・十三オ」

人の情けにて露命をつなくことなれば、行く先とでも同じ事なり、さらば貰ひながらに熊野まで行くべし、と所の人に暇乞ひしければ、心なき土民までその心ざしを憐れみ、五錢三錢、銭を集めて与へしかば、親子喜び立ち出る。未だ年端もゆかぬ身の、いざりの車を引く程に、こ、かしこに暇取り、又山坂に行き詰まり、思はず日数を重ねけり。これを見て子供大勢集まり、車の綱をそ手伝いける。

(通行人)「熊野へ行くとは、おほづかない」

(おさい)「御子様方、お怪我をあそばすな、アイ〜」

(通行人)「人柄の良いいざりじや」

(子供)「ハアよい〜」

(子供)「わい〜とつこい〜」

(喜之松)「小栗判官兼氏殿は、お曲馬乗りが名人だ、よい〜よい〜のよんやさ」

十二ウ・十三オ

上野を出しは九月なれ共、北国の習いにて十月半ば、寒さ

「十三ウ・十四オ」



強く、大雪降り、親子宿るべき所なく、とある軒下へ車を寄せて、古き菰を身に纏ひ、震へ〜いたりける。雪は次第に降り積もり、風に従い身に吹きか、り寒気肌を通せば、親子は手に手を取り交はし涙にくれていたりける。

母はあまりの悲しさに、そも我々はいかなる罪の報いにて、かゝる憂き目に遭ふ事ぞや。父上此世に在さば、我が子に食事は乞はせまじ、かゝる軒端に宿るまじ、此ま、凍へ死なん身の、生きて甲斐なき命ぞや、せめて我が身のなかりせば、かゝる辛さはさせまじきを、幼心の孝行にひかされて、つれなき命を長らへて因果の業を果たすかや、不憫の我が子や可愛や、と思はず知らず、声を上げ、わつとばかりに泣きけるは理せめて憐れなり。

(おさい)「そなたも寒からう、可愛やく〜」

(喜之松)「私はなに、寒くはないよ」

(八左衛門)「ハテ合点の行かぬ、ひそくと、泥棒の囁くのか」

此家の主、百姓八左衛門、親子が泣く声を聞いて、かゝる大雪の夜更けに人の声こそ怪しけれ、と立出で、何者なるぞ早く此処を立去るべし、と叱りけるを、喜之松、これは腰の抜けたる旅の者、此雪にて車動きかね是非なく此処に宿り候、憐れ御情けにて夜の明けるまで、此所にて凌がせて賜れ、と泣く／＼詫びけるを、さては此頃噂ある盗人の手引きする奴ならん、腰抜けなりとは言へども、見るに足手も満足なり、偽りを言ふ奴めかな、と車を取つて投げ出せば、おさいは転び落ちける。喜之松、のふかなしや、と取り纏るを、ありあふ天秤棒にて打たんと振り上ぐる。所の庄屋通りかゝり、八左衛門を押しとどめ、親子を見て不憫なりと、我が家の軒下へ連れ行き、温かき物など食はせ、熊野へ行く由を聞き、厚き筵を着せて憐れみ勞りける。

(八左衛門)「うぬらは泥棒の手引きだな」

(喜之松)「いへ／＼私どもは、左様な悪い者ではござりませぬ」

(おさい)「ア、お許しなされませ」

(庄屋)「コレサ／＼あいらに怪我でもさせると村の厄介だ」

十四ウ・十五オ

喜之松は様々の艱難して、日を経てやふ／＼、紀伊国熊野山の麓に着き、もはやこれよりは車は登り難く、母をば麓に残しおき、辺りの家にて古き酒樽を乞い受けて、母に預け、本宮に詣でつゝ、南無熊野山大権現、何とぞ母が腰、再び元の如く平癒なさしめ給へ、と丹誠を尽くして祈りつゝ、これより毎日／＼温泉を汲みて麓へ運び、かの酒樽の内へ入れ、冷むれば石を火にて焼き、湯の中へ浸けて暖め、母の腰より下を浸しける。げに喜之松が孝行の真を、

「十四ウ・十五ウ」



くまの 熊野三社権現じやごんげんあは 憐れみ給ふ故にや、おさいが痛所いたしよは次第しだひに快く、一七日と申には、三年が間あいだぬ抜けたる腰、元の如く立ちければ、喜よろこふ事限りなく、辺りあたの人これを見て、親孝行かうくの徳なりと、共々ともくこれを感じける。

(喜之松)「なに、母様の腰が立つたとや、嬉しや、有り難や」

(おさい)「ア、□、有り難や。我が子の本望、これは夢かや」

(辺りの人)「御利生は相添はれぬ、不思議く」

十五ウ

麓かもとの人は言ふに及ばず、巫別かんをくつとつう当までも、かく権現ごんげんの憐れみ利益りやく在あす親子おやこなれば、そのま、には置き難しと、色々世話を焼き、新しく衣類いらいを拵こしらへ、親子おやこに着せ、喜之松が優しき心ざしなれば、当所あたしよに足を留めよ、と勧めけれども、上野の国にても諸人の情けを受けたれば、本復したる体を見せ、又権現ごんげんの利益りやくを人に知らせたし、と言いいければ、さ



「十五ウ・十六オ」

らば心任せにすべしと、路銭までを与へける。

「敵討の段は此後編を御覧可被下候」

（おさい）「もふ今度は、車の世話がなくて良からふ」

（喜之松）「段々の御厚恩、申し様もござりませぬ」

（別当）「どうでも国へ帰るのか、やれ〜」

「此後編二冊物出来仕候御求御高覧之程奉願上候」

「南柚笑楚満人作」

十六オ

こ、に相原五郎太夫が本妻、照葉は夫を討たれて家名の断絶を悲しみ、心ならねど人の勧めに任せ、敵とは夢にも知らず小田村伊介を後添に入れ、家を継がせ三年が程を過ぎしける。ある日、うた、寝の夢に先の夫、五郎太夫忽然と現れ、我こそ汝が今の夫、小田村伊介に討たれたり、妾のおさいは、いざりとなり、喜之松諸共、上野国にあり。これを尋ね出して、敵を討たせ、修羅の苦患を救ひくれよ、とかき消す様に失せにけり。照葉、目覚めて驚き、思ひ当

「十六ウ・十七オ」



たる事ことのあれば、こはいかにと心を苦くるしめける。

(五郎太夫) 「敵伊介かたきを後添のちぞへに持つたのは其方そなた知らぬ事こと、些しきか恨うらみとは思おぼはぬ。どふぞ喜よろこ之松のまつを見立みたて、敵かたきを討うたせ、わしが修羅しゆらの苦くるしみを助たすけて下くだされ。とふから此事ことを知らせたく思おもへども、呵責かやくの暇いとまがなかつたわいのふ」

「後篇一冊」

十六ウ・十七オ

てりは正ただき夢ゆめは見みたれども、世よの諺ことわざにも夢ゆめは五臟ごぞうの患わづらいと
照業てりはは正ただき夢ゆめは見みたれども、世よの諺ことわざにも夢ゆめは五臟ごぞうの患わづらいと
言いへば、確たしかにそれとも極きはめ難がたく、ある夜よ、伊介いけいに酒さけを過す
言いへば、確たしかにそれとも極きはめ難がたく、ある夜よ、伊介いけいに酒さけを過す
ごさせ、話はなしのうち、世よの中なかの人は妻つまの為ため、命いのちを捨すつるも
多あふく、危あやうき事ことをもするものを、御身われは我故われゆに少すくしも真まことが
ましき事ことをし給たまひたる事ことなし。我わが身みは例たとへ火なの中なかの水みづの底そこ
までも共ともに入いらん、とこそ思おもひつるに甲斐かひなき人の心こころかな
とかき口説くはげば、伊介いけいは酔よひに乗のりて、今いままでかくとは言い
はねば、知しらざるは理ことわりながら、夫婦ふうふとならんと思おもへばこそ、
身みの罪つみをも顧かへりみず人の命いのちを取りたり、と言いへば、こは我故われゆ



「十七ウ・十八オ」

いかなる人をか殺め給ひしぞ、包まず明かし給へ、隠し給ふは聞こへざる御心なり、と頻りに問ひしかば、つひに五郎太夫を討ちたる様子残らず口走りける。照葉はわざと嬉しき体にもてなしけるが、さては正夢なりとぞ驚きける。こゝに、捨て子の勝之介、腰元おかやと馴れ初め、人知らず忍び会いしが、唐紙の此方にて委細を聞き届ける。

(照葉)「嬉しいぞへ」

(伊介)「なんと真実であらうが」

(勝之介)「ハテサテ、変わった睦言。すりや主人の敵は今
の主人か」

(おかや)「お前は何を聞きとれてゐるのじやへ」

十七ウ・十八オ

かくて、照葉は伊介が口走りしを聞き、もし喜之松が手引
きして、悪人ながら伊介を討たせなば、これまた今の夫を
殺すなり。そのまゝ置かば、冥途の夫へ言い訳なし、と
途方に暮れて居たりしが、文細々と認め、腰元おかやを呼

「十八ウ・十九オ」



び、委細具に言い聞かせ、五郎太夫が刀一腰取り出し、急ぎ上野へ行き、かのいざり女親子に巡り会ひ、此文と此刀を渡しくれよ、と頼み、金三十両路銀にせよ、と遣はしける。おかや委細を聞き、さらばこれよりすぐに行かん、と言いしを止め、故なく暇を出しては、伊介が怪しみ思ふべし、明日折檻の上追ひ出さん、と約束する。又、勝之介は二才の時拾はれ、かく成長せしは、先五郎太夫が思なれば、主人の敵を討たんと思へば、今の主人ゆへ、心をぞ痛めける。

(照葉)「どふぞ、探し出し手渡ししてたもれ。得心で嬉しい。必ず漏れぬよふに」

(おかや)「かしこまりました。親父に申し聞かせ二人で探ませう」

(勝之介)「ハテ何としたものじゃナア」

十八ウ・十九オ

照葉はかねておかやと約束なれば、夫に様々怪気を言ひ、

はしたなく罵り打擲し、大事の夫を寝取らんとする曲者、そのまゝにておくべき、と悪口する。元より伊介も覚へな
 き事なれば、迷惑して色々宥めけれ共、聞き入れず、あまつさへ夫をも、訊あればこそ此女を庇い給ふと覚へたり、
 と言ひ募り、急ぎおかやが宿を呼び寄せ、おかや不屈なる事あれば、暇を遣はずなり、早く引き取りて行くべしと、
 日頃の情け深きに引き替へて、葛籠、櫛箱まで投げ出して、這這追ひ出しける。これは伊介に怪しめられざる謀事に
 てありける。

〔伊介〕「これはく何事じや」

〔照葉〕「此あまめは裾張なふといやつだ。ちつと渋皮が剥けたと思つて、わしが大事の夫へ、手もねへくせに、足を
 つけよふとは、ふさぐしい。痛いかく、エ、もふじれつたへ」

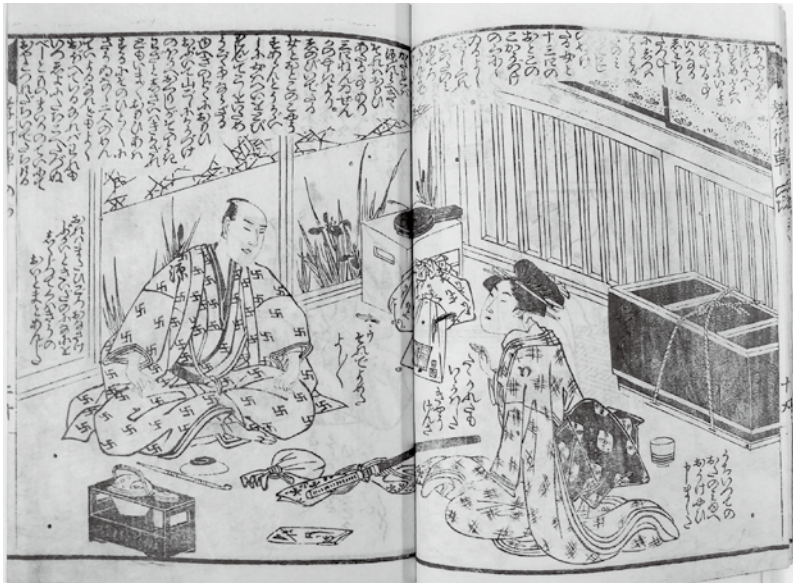
〔おかや〕「アイく、御免く」

〔伊介〕「日頃に合はせぬ悋気焼き餅、珍しい事じや。もふく堪忍してやれく。俺まで迷惑。そんな事はないよく」

十九ウ・二十オ

おかやが親、源次兵衛は娘が火急に暇出でたる事、いかなる仕落ちと尋ねしに、実は照葉が頼みにて、腰の抜けたる
 女と十三、四の男の子、上野の国にゐるよし、探しくれとの頼みにて、路銀まで貰いし、と語れば源次兵衛聞き、そ
 れは思ひ当たる事あり、三、四年以前、彼の屋敷より忍び出でたる女と男の子、様子あらんと窺いしに女は塀を飛び
 損じて、腰を痛め、動く事ならざるゆへ、気の毒に思ひ、負ふいて山越しに上野の方へ送りしが、その時わざと子細
 は聞かざれども、今々思ひ合はするにその人々に相違なく、二人の面体、夜なれどもよく覚へているなれば、我も

「十九ウ・二十オ」



いっしょに立ち越へ尋ぬべし、と物参りの体にて親子連れ立ち出で立ちける。

(おかや)「討ち入つてのお頼みゆへ、お請けやひ申ました」

(おかや)「叩かれたも言い交はした狂言さ」

(源次兵衛)「ム、ウ、それで読めた、よし〜」

(源次兵衛)「俺はまた、日頃お情け深いと聞いたのに、何をしくじつて火急のお暇と案じた」

二十ウ

されば照葉は、冥途と此世の二筋の義理に絡められ、胸を苦しめけるが、おかやに、喜之松おさいが事を頼みおき、もはや心にかゝる事もなしと、それよりわざと気の違ひたる体にて、様々なる無駄事を言いて、泣きつ笑いつ狂い回れば、伊介を始め家内の者、色々と介抱せしに、折を窺ひ、つい自害し失せにける。伊介は驚き、もしや助かる事もあらんかと心を尽くしたれども、その甲斐ついになかりけり。

(勝之介)「これもふし、何ゆへのお自害じや」



(照葉)「ア、ひいやりとよい心持ちじや」

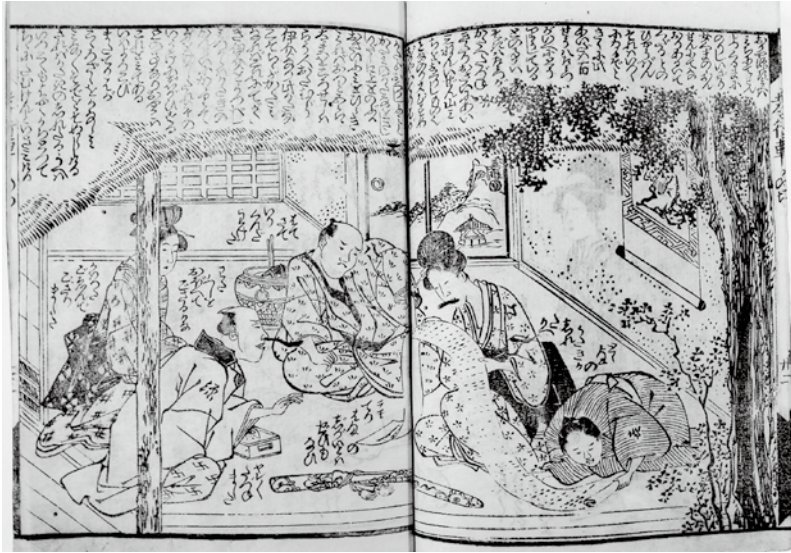
(伊介)「氣違殿これはどふだ、ひいやりどこかこれやア
い〜〜」

二十一オ

源次兵衛、おかやは、照葉が自害せし事を聞き、いよ〜
命に懸けて、喜之松親子を尋ね出さんと、急ぎ上野へ立ち
越へ、此処彼処問ひ歩きけるに、そのいざり女は先月、
熊野の温泉に入らんと車にて上りたり、はや五十日程にな
れば、熊野の山にぞゐるならん、と確かに聞き、さらば我々
も熊野まで尋ね行かん、と思ひ立ち、道々かゝる女のいざ
りの車に乗りたるが通りしや、と問ひ〜尋ねて上りける。
(村人)「なるほど〜、村でも随分目をかけてやりました」
(村人)「いざりでも良い女さ」
(源次兵衛)「それは年格好も私共が尋ぬる人に違ひはこ
ごらぬ」
(源次兵衛)「熊野まで行きましたか」



熊野山の利益にて、三年の腰抜け元の如く本復して、喜之松親子一先づ上野へ立ち帰る道にて、いづぞや雪降りに盗人なりと怪しめられ、難儀したる時、労りくれたりし庄屋が方へ立ち寄り、礼を述べける。庄屋、腰の立ちたるを見て肝を潰して、権現の利益を感じければ、百姓八左衛門聞いて大きに驚き、かくの如く神仏の擁護し給ふ人々を知らづして、辛く当たりし勿体なや、と後悔し親子へ様々詫言を言い、その上我が家へ伴ひ女房諸共、色々馳走して逗留させけるに、親子は元常陸の者と聞き、八左衛門涙ながら語りけるは、前度、能楽者にて夫婦奉公稼ぎに出しが、故あつて二才になる子を、相原五郎太夫といふ人情け深しと聞いて、門口へ捨てたりしに、案の如く取り上げ育て、家来とし給ふよし、もはや十七才と覚へたり、その後は如何なりしや知らず、と言ふ。おさい聞いて、その五郎太夫こそ此子の父よ、捨て子は勝之介也、と聞いて尚々たまげ、さては大切の御主人なり、とて敬ひける。



「二十二ウ・二十三オ」

(八左衛門)「女房も私も若氣にて、つまらぬ訳ゆへ是非なく捨てました」

(女房)「不思議なご縁でござります」

(庄屋)「それでは貴様逃れぬ人じや」

(おさい)「私も勝之介は可愛がつてやつたものさ」

(喜之松)「それは〜気の軽い良ひ者よ」

二十二ウ・二十三オ

おかや源次兵衛は道にて、先日、車に乗りしいざり女、熊野の温泉にて治り、歩いて下るとの評判、それはいづくにゐるぞ、と聞くに、此間は百姓八左衛門が家に逗留してゐるとの事、急ぎ八左衛門が方へ訊ね来たり、おさいに会い、三年前山道を送りし者也、と名乗り、又、娘おかやは照葉が方より送りし文と形見の刀を差し出し、口上を述ぶる。おさい文を開き見れば、夫五郎太夫を殺せしは、浪人小田村伊介なり、此刀こそ父が形見なれば、これにて敵伊介を討つべし、自らは敵の奸計にかゝりて身を汚したれ

「二十三ウ・二十四オ」



は、その言いに、自害する、との事なり。親子はこれを見て、あるいは喜び、また照葉が志を悲しみ、皆々袖をそ濡らしける。されば敵の知れたる上は、一刻も早く討ち取つて、父に手向けんと勇みける。

(喜之松) 「父様の敵が知れたかへ」

(おさい) 「テモ照葉様の自害とは是非もなひ」

(八左衛門) 「はてさて入り組んだ訳だ」

(おかや) 「私を覚へてござるかな、変はつたご縁でござりました」

(源次兵衛) 「ヤレ、尋ねました」

二十三ウ・二十四オ

喜之松おさいは急ぎ、おかや源次兵衛と常陸へ赴かんとしければ、八左衛門も我が子に会いたく思ひて、御供せんと後の事は女房に言い含め五人連れにて下り、源次兵衛が方へ落ち着き、敵の様子を聞かんと、おかやに文をした、めさせ、勝之介が方へ遣わしければ、早速来たり、人々に

対面し、ありし事ども語りける。八左衛門は勝之介を見て、我こそ汝が二つの時、抛所なき訳にて相原の門へ捨てたる実の親なり、と名乗りて互ひに涙に噎び、かく足手の伸びたるは、主人の大恩、身を粉に砕くともなかく尽きずと有難く存ずる、と言ふに、おさい、そなたを招く事他ならず、五郎太夫の敵と言ふは小田村伊介なり、何とぞ手引きして、此子に討たせくれよ、と頼む。勝之介もかねて立ち聞きして、敵は伊介と知りけれども、今の主人なる故、思ひ扱ひぬたりしに、人々に頼まれ、心決して請け合ひ、しばらく時節を待ち給へ、たゞ今忍び入らせんは易けれど、もし仕損ぜば無念なり、良き折を見て知らせん、と約束をぞしたりける。

(おかや)「さぞ嬉しからふ、私も久しぶりで顔を見て嬉しい」

(八左衛門)「ヤレ／＼大きくなつた。さぞ今迄は俺を鬼か鬼神と思つていたらふがの、難しい訳で仕方なしに捨てたが、忘る、間は無かつた」

(勝之介)「さてはお前は父様か。照葉様御夫婦のお情け故、斯様に成人致しました」

(源次兵衛)「なるほど、憐れな対面だ」

(おさい)「そなたを頼りにしているほどに、必ず頼みます」

二十四ウ・二十五オ

ある夜、勝之介走り来たり、明日こそ小田村伊介、内々の用事ありて、供をも連れずたゞ一人他行する也。ほうをうじ村辺りに待ち給へ。討つべき時は此節なり、と知らせけるほどに、人々勇み、早朝よりも支度して、幸ひ源次兵衛が心安き所あれば、これを頼み忍びゐて、今や通ると待ちあける。かくとは知らず小田村伊介たゞ一人にて通りしを

「二十四ウ・二十五才」



見ると等しく親子駆け出で、いかに小田村伊介、汝が為に討たれたる相原五郎太夫が忘れ形見喜之松、同じく妾おさ、尋常に勝負せよ、と詰め掛くる。伊介からくとうち笑い、かく現れたる上は是非もなし、いかに相原五郎太夫を討つたるはかく言ふ小田村伊介なり、いでく汝ら返り討ちにしてくれん、と段平物をひらりと抜き、暫く斬り合ひしが天命に背きたる小田村、か弱き親子が一念の刃に当たりかね、ついに此処にて討たれしは、心地よくこそ見へにける。

(八左衛門)「急くまいくそふだく」

(源次兵衛)「ア、潔ひくそこをつけこんでく」

(喜之松)「小田村伊介、天運循環、父の敵思ひ知つたか」

(伊介)「小癩な奴らだ、飛んで火に入る夏の虫、俺を討つとは虫がい、一々返り討ちだぞ、ア、これは久しい台詞だ」

(おさい)「こなたの巧みで様々の艱難したわいのふ」

(勝之介)「もふく逃れませぬ、討たれてつかわされませ」

〔二十五ウ〕



二十五ウ

さても相原喜之松、難なく父の敵、小田村伊介を討ち取り
 再び世に出で、栄へしかば、勝之介とおかやと夫婦になり、
 源次兵衛は楽隠居、また八左衛門も国元へ立ち帰り数多
 田地を増やして、皆々めでたく栄へける。これ偏に孝行の
 志を熊野権現感応まし、かゝる利益を施し給ふと、
 貴賤上下押し並べて感ぜぬ者こそなかりける。

(おさい)「ア、嬉しや〜」

(喜之松)「めでたい〜」

(おかや)「おめでとふ存知ます」

(勝之介)「おめでたい〜」

「戯作南柚笑楚満人」

「豊国画」

おわりに

本稿をまとめるにあたり、板坂則子先生、二又淳先生に御教示賜りました。深謝申し上げます。